

「花火師」という仕事

～名張川花火大会を見て～

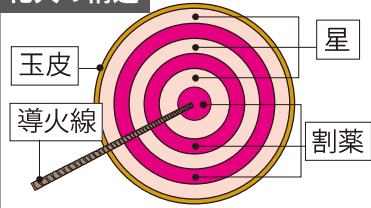
豆記者新聞

10月4日
(土曜日)

<発行元>
蔵持市民センター
名張市蔵持町原出
314番地の3
電話番号
0595-63-0235.
平日: 9時～16時



花火の構造



私たちは「子ども記者クラブ」に応募するにあたって「地元の花火大会がどのようにして造られているのかを知ること」をテーマにした。幸いにして7月26日の「名張川納涼花火大会2025」の当日、名張川左岸の打ち上げ現場で、花火師の脇坂晃治さん(48・脇坂火薬株式会社社長)にお話を聞くことが出来た。脇坂火薬(山添村片平)は大正14年創業で産業火薬(鉄砲の火薬等)を製造していて、今年で100年になるという。脇坂社長は5代目。花火師になろうと思ったきっかけを訊ねると「子どもの頃から花火師として活躍している父親の格好いい姿を見て育ってきたから、そうなりたいたいと思ったし、なるものだと思っていた」と話す。

花火が上がるまで

花火があがるまでまずやることは、4月頃、打ち上げのための書類を準備し、許可を貰いに行くことから始まる。そして花火のテーマを決める。今年のテーマは『ふるさと夏の輝き』と決めた。続いて大会の構成を決め、コンピュータでプログラミングをすることで、花火があがるまでの全ての流れが決まる」という。

花火師あるある

「花火師あるある」を聞いてみると「打ち上げ台の近くにいて、大きい音を何回も聞くので、耳が遠くなりがち」という。「夏は凄く多忙になるので、休憩の時間など、どこでも直ぐに眠れてしまう」しかし「一日中緊張感があるのであまり眠れなくて夜中の2時3時になることが多く、そのせいか夏が終わると、溜めていた睡眠不足を吐き出すように、昼寝をよくするようになる」と、夏中過ごしたきつい労働を事もなげに話していた。

花火の構造

打ち上げ花火の花火玉は「星」「割火薬」「玉皮(たまかわ)」「導火線」から出来ていて、「星」は光や煙を出しながら燃える火薬の粒。「割火薬」は、花火玉を包んでいる「玉皮」を上空で破壊し、中に詰められている「星」を引火して勢いよく飛ばす火薬。「導火線」は玉の内側に向かって燃えていき、中心の割薬に引火する。打ち上げた時に点火され、花火玉が最も高く上がった時に引火するよう長さを調節する。花火が打ち上がるときの「ひゅーっ」と言う音は、花火玉に笛を取付けて鳴らし

ている。複数の箇所と同時に打ち上げるときは、「せーの」の「せ」で上げるか「の」で上げるか、細かいタイミングを予め決めていくという。

脇坂さんの話す 花火の魅力

脇坂さんは「形が残らなくて、花火が消えた後の夜空の美しさが、何ともいえない感慨がある」「テストが出来ないから、打ち上げるまでどんな風になるのか分らないところが面白い」「名張川の花火大会は3カ所から打ち上げをしているので、見る場所によって見え方が違う」「山が近いので音の迫力が違う」と話してくれた。そのお話を思い出し、夜の花火大会では、花火の華やかさと夜空に消えていく儚い美しさを、ことのほか感じた。

花火師がこんな近くにいることに驚いたが、今回の取材で、花火や祭りが身近に感じられて幸せな気分になった。真夏の暑さの中で100%安全とはいえない危険もある中で、自分たちが知らぬ間に、一瞬の輝きがい出になるほど楽しませてくれる花火師さん達に、改めて感謝したいと思った。

8月4日横浜の「みなとみらいスマイルトフェス」で花火が暴発し、台船火災で大会中止後も深夜まで花火が断続的に打ち上がった事故があった。後日そのことを脇坂社長に聞くと「安全には常に心がけているが、それでもちょっとしたことで事故が起こってしまう。今まで以上に気をつけたいといけないと思う」と気を引き締めた様子で話していた。

英心高等学校桔梗が丘校2年生
西出梓・別所歩美・山村歩乃花